

ヒマラヤシーダーに発生した灰色かび病

長崎県総合農林試験場 久林 高市

1. はじめに

1986年4月下旬長崎県諫早市でヒマラヤシーダーの新芽が赤褐変、枯死する病気を見出したので、調査した結果灰色かび病であることがわかった。灰色かび病菌は多くの草本性及び木本性植物を侵し、侵害する部分は葉、花、芽、新梢、果実等各部にわたっていることが知られている¹⁾。しかし、ヒマラヤシーダーに発生した報告は見当たらないようであるので、その概要を報告する。

なお、病原菌の同定をしていただいた林業試験場樹病研究室長小林亨夫博士に深く謝意を表する。

2. 被害木とその概況

本病が発生していたヒマラヤシーダーは公園の緑化木として植栽されているうちの1本である。樹齡は不明であるが樹高は約2m、根元直径5cm、枝下高0.6mの孤立木である。そのほか園内にはイチョウ、サクラなどが並行して植栽されている。

この公園は高台にあり、東側は切取崖で遮へいされているが、ほかの方向からの風はよく通る。被害木から数m離れた場所では基岩が露出していることから推して、この公園の土壌はうすいようである。

被害は新芽にのみ認められ、樹冠の部位の違いによる発病の差はなかった。

3. 病 徴

4月頃に新芽全体が赤褐色となって枯れ、4月下旬から5月上旬には灰褐色となる。変色とともに新芽全体が枝部から萎凋下垂し、針葉は相互に密着した様な状態で乾固する。更に時がたつと、針葉が相互に分離・離脱して新芽部が消失した例も見られた。

4. 標徴及び病原菌

変色下垂した新芽の針葉部分は4～6月にかけて褐色の菌そうで覆われ、特に梅雨期など高温多湿の条件下では、病徴(患)部全体がはじめ灰白色のち灰褐色

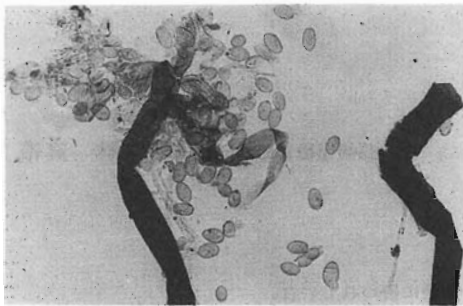
の標徴に覆われていた。

分生子梗は針葉の基部から先端部にかけて針葉に対して直角方向に密に形成され、数本が集まって束状となり、全体として綿毛状を呈していた。分生子梗は淡褐色に着色するが基部で濃く、先端部で淡い。また先端部では枝状に数回分枝し、小枝の先端部は淡色、円頭状を呈し、その部分に淡褐色の分生子をブドウの房状に多数着生する。分生子梗は長さ300～600 μ 、分生子は無色、単胞、円形～楕円形で、大きき11～19 \times 5～11 μ であった。

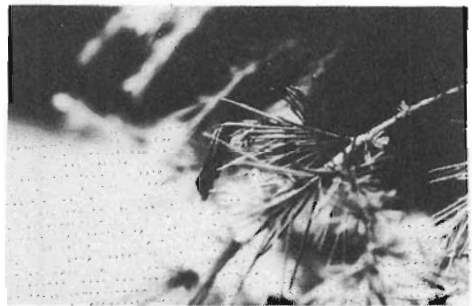
本病菌の分生子の大きさをスギ灰色かび病菌(8.4～16.8 \times 5.2～9.6 μ)²⁾、カラマツ灰色かび病菌(7.7～14.7 \times 5.8～8.6 μ)³⁾と比較すると、長径では上限、下限とも本菌の方がやや大きく、短径では上限がヒマラヤシーダー灰色かび病菌の方がやや大きい。しかしながら別種とするほどの大きな差ではなく、また分生子梗ならびに分生子の形状も一致することから、本病菌は、*Botrytis cinerea* Persと同定された。

引用文献

- (1) 伊藤一雄：樹病学大系、Ⅲ、181～184、農林出版、1971
- (2) 伊藤一雄・保坂義行：林試研報、 μ 51、1～27、1951
- (3) 伊藤一雄・保坂義行：林試研報、 μ 59、33～44、1953



(灰色かび病により萎 下垂した
ヒマラヤシーダーの新芽部)



(灰色かび病菌の分生子及び分生子梗)